

第 55 回国語分科会国語課題小委員会（Web 開催）・議事録

令和 4 年 12 月 23 日（金）
10 時 00 分 ～ 12 時 00 分
文部科学省 5 階 5 F 6 会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査、森山副主査、石黒、川瀬、西條、佐藤、滝浦、田中、中江、成川、
福田、古田、前田、村上、善本各委員（計 15 名）

（ゲスト）滋賀大学准教授 長岡由記氏

（文部科学省・文化庁）圓入国語課長、武田主任国語調査官、堀国語課長補佐、
鈴木国語調査官、町田国語調査官ほか関係官

※ 沖森主査と事務局は、文部科学省 5 F 6 会議室にて参加。

〔配布資料〕

- 1 第 54 回国語分科会国語課題小委員会議事録（案）
- 2 国語分科会で今後検討すべき課題に関する意見（第 54 回まで）（案）
- 3 小学校国語科におけるローマ字学習について（長岡由記氏提供）
- 4 国語分科会で今後取り組むべき課題として取り上げる事項（案）

〔参考資料〕

- 1 国語に関するコミュニケーション上の課題（国語課題小委員会における審議経過の整理）（令和 4 年 3 月 8 日 文化審議会国語分科会）
- 2 今期（22 期）以降の国語課題小委員会における審議事項
- 3 国際社会に対応する日本語の在り方（抜粋）（平成 12 年国語審議会答申）
- 4 分かり合うための言語コミュニケーション（抜粋）（平成 30 年国語分科会報告）

〔関係リンク〕

[ローマ字のつづり方（昭和 29 年内閣告示第 1 号）](#)

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認があった。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 長岡由記氏から、配布資料 3 「小学校国語科におけるローマ字学習について（長岡由記氏提供）」について説明があり、説明に対する質疑応答及び意見交換が行われた。
- 4 事務局から、配布資料 4 「国語分科会で今後取り組むべき課題として取り上げる事項（案）」について説明があり、説明に対する質疑応答及び意見交換が行われた。
- 5 次回の国語課題小委員会について、令和 5 年 1 月 24 日（火）午前 10 時から正午まで、オンラインで開催する予定であることが確認された。
- 6 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

定刻になりましたので、ただ今から、第 55 回、今期 6 回目の国語課題小委員会を開会いたします。今回もオンライン上でのウェブ会議となりましたが、よろしくお願

いたします。

さて、本日は、議事次第のとおり、(1)今後取り組むべき国語施策に関する課題について、(2)ローマ字のつづり方に関する整理について、(3)その他という内容で協議を行いたいと考えています。

事前に資料を御覧いただいているかと思いますが、本日は、滋賀大学教育学部准教授の長岡由記さんに御出席いただき、主に学校教育の観点から、ローマ字に関するヒアリングを実施することとしています。また、ヒアリングの後、残された時間で、今期の終わりに向けて、課題整理の取りまとめの方針についても御検討いただこうかと考えています。

それでは、ヒアリングに移りたいと思います。本日は、学校、特に小学校国語科におけるローマ字教育の実情、また、教師と児童の意識などについてのお話を伺い、意見交換をしたいと考えています。そのために、滋賀大学の長岡由記さんをお招きいたしました。長岡さんは、国語科教育学を御専門とされ、その中でも特に漢字や仮名をはじめとする文字教育にお詳しいと伺っています。

小学校におけるローマ字教育は、戦後すぐに始まり、現在まで続いています。一方で、国語科においてローマ字教育が行われている目的やその意義について、現場の教師、そして児童がどのように考え、受け止めているかについては、必ずしも明らかでないように思われます。平成期以降、ローマ字教育に関する研究や実践報告なども決して盛んとは言えない現状にあるとも伺っています。

そのような中で、本日は、ローマ字教育に関する御研究があるほか、教育の現場にもよく通じていらっしゃる長岡さんにヒアリングをお願いしました。貴重なお話が伺える機会になるかと期待しています。長岡さんには配布資料3「小学校国語科におけるローマ字学習について（長岡由記氏提供）」を御用意いただいています。こちらを御覧になりながらお話をお聞きくださるようお願いいたします。

では、長岡さん、よろしく願いいたします。

○長岡氏

御紹介ありがとうございます。滋賀大学の長岡と申します。よろしく願いいたします。

本日は、配布資料3に沿ってお話しします。主に次の3点から見ていきたいと思えます。一つ目はローマ字学習の目的について、二つ目はローマ字学習（指導）の内容について、三つ目はローマ字学習（指導）の困難点についてです。

一つ目です。ローマ字学習の目的については、以下の2点からまとめています。まずは簡単に、「①小学校学習指導要領におけるローマ字学習（指導）の位置付け」を見ていきたいと思えます。次に、「②指導者は、ローマ字学習の目的をどのように捉えているのか」ということについて、これはアンケート調査を基に明らかにしていこうと思っています。

では、「①学習指導要領におけるローマ字学習の位置付け」についてです。昭和22年2月に「国民学校におけるローマ字教育実施要綱」が発表され、この実施要綱によって、同年から、小学校において、事情の許す限り、児童にローマ字による国語の読み方、書き方が、第4学年又は第3学年以上で、1年を通じて40時間以上、国語あるいは自由研究の時間のうちで行われることになっています。昭和22年に発行された試案には、「生活に必要な文字」—ここにローマ字が含まれています—「や、かなづかいになれさせる。」とあります。また、「ローマ字で読み書きできるようにする。」という目標になっています。

次の昭和26年に発行された試案では、第六章に「ローマ字の学習指導」が新設されています。そこでは、「ローマ字を読みこなす力を養う。」、「自分の考えをローマ字

で書き表す力を養う。」、「ローマ字書きの決まりを身につけて、正しく表現する力を養う。」、「気軽にローマ字を使う習慣と態度を養う。」と記されています。

次の昭和 33 年告示においてローマ字教育は必修化されました。したがって、ローマ字教育は、施行年度である昭和 36 年の 4 月から必修となっています。4 年生以上に設定されていて、第 4 学年では年間 20 時間程度、「「、」（てん）をうち、またその他のおもな符号などの使い方を理解すること。（ローマ字文の場合を含む。）」とあります。さらに、「ローマ字で書いた語や簡単な文などを読むこと。」、「ローマ字で語や簡単な文を書くこと。」と設定されています。

第 5 学年は、年間 10 時間程度と設定されていて、「第 4 学年で学習したことのうえにたつて、簡単なローマ字の文章を読むこと。」、「わかち書きに注意して、ローマ字の文を書くこと。」、「ローマ字に使われるおもな符号について理解すること。」とあります。

第 6 学年も同じ年間 10 時間程度で、「第 5 学年で学習したことのうえにたつて、簡単なローマ字の文章を読むこと。」、「正しくわかち書きをして、簡単なローマ字の文を書くこと。」と設定されています。

ここまでは文や文章の単位まで学習することになっていますが、次の昭和 43 年告示版では単語に変わっています。「第 4 学年において、ローマ字による日常ふれる程度の簡単な単語の読み書きを指導するものとする。」と記されています。

次の 52 年、それから平成元年も続けて、「日常使われる簡単な単語について」とあります。

次の平成 10 年の告示版では、「第 4 学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、また、ローマ字で書くこと。」とあります。ここまでは第 4 学年で教えることになっていますが、次の平成 20 年の告示では、第 3 学年に変わっています。

ここまでの経緯を簡単にまとめたのが、6 ページの下にまとめている図です。

現行版は、平成 29 年告示で令和 2 年度に施行されたものですが、ここでは、「第 3 学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと。」と記されています。

次に、小学校学習指導要領の解説にどのようなことが書かれているかをまとめています。「ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くことは、ローマ字での読み書きについて示したものである。ローマ字表記が添えられた案内板やパンフレットを見たり、コンピュータを使ったりする機会が増えるなど、ローマ字は児童の生活に身近なものになっていることなどを踏まえ、第 3 学年で指導するものとする。」とあります。これは平成 20 年度と同じような内容になっています。「日常使われている簡単な単語とは、地名や人名などの固有名詞を含めた、児童が日常目にする簡単な単語のことである。」ということも記されています。

次からは新しく書き加えられたところですが、「ローマ字の表記に当たっては、「ローマ字のつづり方」（昭和 29 年内閣告示）を踏まえることとなる。ここでは、「一般に国語を書き表す際には第 1 表に掲げたつづり方によるものとし、「従来の慣例をにわかにならぬ改めがたい事情にある場合に限り、第 2 表に掲げたつづり方によっても差し支えない」とこととされている。「第 1 表（いわゆる訓令式）による表記の指導に当たっては、日本語の音が子音と母音の組み合わせで成り立っていることを理解することが重要である。」と書かれていて、「第 2 表（いわゆるへボン式と日本式）による表記の指導に当たっては、例えば、パスポートに記載される氏名の表記など、外国の人たちとコミュニケーションをとる際に用いられることが多い表記の仕方を理解することが重要である。」と記されています。

ここに「ローマ字のつづり方」についての文言が書き加えられているのですが、詳細

については、この後、御説明します。今回、小学校の先生方を対象としたアンケート調査を行ったところ、これまでに「ローマ字のつづり方」を見たことがありますかという質問に対して、「はい」という答えが14%、「いいえ」という答えが86%という結果でした。この調査結果からは、解説に示されていることについては、まだ十分に周知されていない状況であるということが推測できます。

「内容の取扱いについての配慮事項」のところに、コンピューターで文字を入力することについて記されています。「第3学年におけるローマ字の指導に当たっては、第5章総合的な学習の時間の第3の2の(3)に示す、コンピューターで文字を入力するなどの学習の基盤として必要となる情報手段の基本的な操作を習得し、児童が情報や情報手段を主体的に選択し活用できるよう配慮することとの関連が図られるようにすること。」と記されています。解説には、「総合的な学習の時間における、コンピューターで文字を入力するなどの学習との関連が図られるよう、指導する時期や内容を意図的、計画的に位置付けることが重要である。」と示されています。

ここまでは学習指導要領の位置付けを簡単に見てきました。

次に、実際に「②指導者は、ローマ字学習の目的をどのように捉えているのか」という点について見ていきたいと思います。

今回、質問紙調査による小学校国語科におけるローマ字学習指導の実態調査を行いました。調査対象は、小学校の教員経験者48名の先生方です。現職教員、又は研究機関に今所属されている教員を対象としています。調査時期は12月5日から16日までです。年末の大変忙しい時期に実施したので、48名の先生方は、かなり大変なところで御回答いただいているという状況です。調査方法については、グーグルフォームによるウェブ調査で行いました。調査対象者の勤務年数の内訳については、11ページのグラフに示しているとおりです。

まずは、「国語科におけるローマ字学習は、何のために行うと思いますか。それぞれの項目について、当てはまるものを一つずつ選んでください。」という質問について取り上げます。選択肢は、9項目挙げています。「ローマ字による語の読み方・書き方を理解するため」、「ローマ字による文の読み方・書き方を理解するため」、「日本語の音声の捉え方の仕組みについて理解するため」、「日本語の単語について意識できるようにするため」、「日本語の文法について意識できるようにするため」、「ローマ字で読み書きする習慣をつけるため」、「同音異義語の言い換えなど、耳で聞いただけで意味が分かる日本語の使い方について意識できるようにするため」、「パソコンやタブレットにローマ字入力をする際に役立つため」、「外国語(英語)教育におけるアルファベット学習に役立つため」です。結果はグラフに表しています。「語の読み書き」については、「そう思う」と答えた方が62.5%、「ある程度そう思う」という方が35.4%で、かなり多くなっています。一番多かったのが、「ローマ字入力に役立つため」で、これは、「そう思う」と「ある程度そう思う」という肯定的な回答が100%という結果になっています。「文の読み書き」についても、「そう思う」が27.1%、「ある程度そう思う」と答えた方が37.5%で、60%を超えるという結果になっています。

次の質問です。「あなたは、パソコンやタブレットにローマ字入力をする方法を、どの時間に教えますか。それぞれの項目について当てはまるものを、一つずつ選んでください。」という質問で、どの程度当てはまるのか調査しています。これは、パソコンのローマ字入力について、総合的な学習の時間で主に教えられているのか、それとも、国語科の方が担っている役割は大きいのかということが気になったので設定した調査項目です。「使用する際にその都度教える」という項目も入れています。結果は、「国語科の授業」で当てはまるという回答がかなり多くなっています。次が、「使用する際

にその都度教える」という結果です。「休み時間」や「特別活動の時間」に教えるという回答は少なくなっています。

次に、ローマ字学習（指導）の内容について見ていきたいと思えます。3点に分けています。「①小学校国語教科書におけるローマ字学習の内容」、「②授業で実際に取り上げられている学習（指導）の内容」、そして、「③複数のつづり方について」取り上げています。

「①小学校国語教科書におけるローマ字学習の内容」から見ていきます。学習指導要領では、「第3学年においては、日常使われている簡単な単語について、ローマ字で表記されたものを読み、ローマ字で書くこと。」と記されています。国語教科書に採録されている教材は、ローマ字表記について、大体載せられている状況です。ローマ字表記については全ての教科書で掲載されていて、一部の教科書では、アルファベット一覧というものも掲載されています。3年生の教科書とは異なりますが、5年生の教科書に、日本語と外国語の比較を載せて、日本語の特徴について理解できるようにするという教材も入っています。また、ローマ字の書き方、身の回りにあるローマ字表記の例を挙げているものもあり、ローマ字の決まりについては、拗音、長音、促音、撥音、大文字と小文字、符号、複数の書き方についても少し入っています。大体このような項目で教科書教材は採録されているという状況です。

ローマ字表について、17ページに一例として取り上げています。注目したいのが、ダ行イ段の「ぢ」です。「j i」というへボン式は掲載されていません。「ぢゃ・ぢゅ・ぢょ」のところも同じようです。このようなローマ字表が掲載されています。

複数の書き方については、右の表にまとめました。「し・ち・じ・ぢ」といったものです。「ぢ・ぢゃ・ぢゅ・ぢょ」のところはへボン式については掲載されていません。

また、ローマ字の入力表についても、一部の指導書に掲載されていました。「ん」のところに「NN」が入っています。また、先ほどローマ字表には載せられていませんでしたが、ダ行の「ぢ」は「D I」と書かれています。「ぢゃ・ぢゅ・ぢょ」も同様です。

このような状況があることを踏まえて、19ページに小学校の国語教科書（3年）における複数の書き方の採録状況について一覧にまとめました。各社のずれは少しありますが、「し」と「ち」については結構載せられているという状況です。「じ」については1社のみ掲載されています。「ぢ」は、ローマ字入力のところでは書かれています。表記については例示されていませんでした。「ふ」は全社に採録されていて、「を」と「ん」については入力のところで掲載されています。拗音については、「しゃ」が一番多く取り上げられていて、「しゅ・しょ・ちゃ」のところは、入力で主に取り上げられていますが、採録されている教科書は少ないという状況になっています。「ぢゃ・ぢゅ・ぢょ」以降については、ほとんど取り上げている教科書は見られませんでした。なお、この表に書いている括弧に記したつづり方は、教科書のローマ字表には掲載されていないものです。

次に移ります。身の回りで目にするローマ字表記の採録状況についても一覧にまとめました。

ここに挙げているものが、身の回りで目にするローマ字表記として、現行版の小学校国語教科書（3年）4社に採録されている「案内版・掲示板等」で、イラストも含まれます。そこに記されているローマ字表記を抜き出して、五十音順に並べたものです。ローマ字表に記載されていなかった字、それから「ん」について、へボン式のものが掲載されていることが分かります。一つ目が「徳地（とくぢ）」という地名です。ここでは

「j i」が掲載されていて、「ん」についても案内板や掲示板で「神保原（じんぼはら）」と「新町（しんまち）」が載っています。ローマ字表には掲載されていない身の回りで目にするつづり方についても掲載されていることが確認できました。

次は入力方法についてです。これは指導事項ではなく、「内容の取扱いについての配慮事項」のところに載せられています。全ての教科書において、ローマ字入力の学習に関する教材が載っています。入力について、まずローマ字を選択し、平仮名表記になったものを、更に漢字仮名交じりに変換するというようなことを学習しています。また、書き方が二つあるもの、ダ行の「ぢ」、「づ」、「を」、「ん」、のばす音（長音）、つまる音（促音）などについて書かれています。変換については、全社ではありませんが、一部の教科書で記載されていました。コンピューターによっては違う打ち方で入力するものがあるということを明記している教科書もあります。

次に、「②授業で実際に取り上げられている学習（指導）内容」はどのようなものなのか明らかにするために実施したアンケート調査の結果を見ていきたいと思えます。この項目は、「これまでに、児童にローマ字を教えたことがありますか」という質問に対して、「はい」と回答された方のみを対象としています。「小学校国語科の授業で、実際に取り上げたことのあるローマ字学習の内容を、全て選んでください。」という質問で、以下の項目を設定しています。「ローマ字一字ずつの書き方を教える」、「ローマ字表記（語）の読み方・書き方を教える」、「ローマ字文の読み方・書き方を教える」、「ローマ字入力の仕方を教える」、「ローマ字を用いて日本語の音声の捉え方の仕組みについて教える」、「ローマ字文を単語や文節などに分ち書きして書き表わす方法を教える」、「ローマ字文を用いて日本語の文法を教える」、「ローマ字で読み書きする習慣をつける学習活動を行う」、これは例として「ローマ字で日記を書く」などを挙げています、「ローマ字文を用いて、同音異義語の書き換えなど耳で聞いただけで意味が分かる日本語の使い方について考える学習活動を行う」です。

23 ページのグラフは、その結果を示したものです。最も多いのが「一字ずつの書き方」を教えるもので、97%の回答でした。「語の読み方・書き方」が93%、「ローマ字入力の仕方」が90%、「文の読み方・書き方」が79%という結果になっています。「日本語の音声の捉え方の仕組み」や、「分ち書きして書き表す方法」という回答も、それぞれ32%ずつ回答がありました。「読み書きする習慣をつける」というのも13%となっています。ほかは少ないです。

次は、「③複数のつづり方について」、少し例を挙げて、どういうつづり方をしているのか、調査を行いました。「あなたが「つくし」をローマ字で書くなら、どの書き方で書きますか（入力しますか）。それぞれの場面に当てはまる書き方（入力の仕方）を全て選んでください。」という質問です。これは、四つの場面で分け、それぞれどのような書き分けが行われているのか調査しています。

1 番目が「小学校国語科の授業で、児童にローマ字の書き方を教えるために板書する場合」、どのような書き方をするのか聞いたものです。訓令式で書くと答えた方が75%、次にへボン式が43.8%、そして、下二つは交ぜ書きですが、それぞれ8.3%という結果になっています。「その他」のところに入力の場合という回答が含まれているので、設問の書き方が少し良くなかったと思った部分です。入力の仕方も含めて考えられている方が一部いらっしやっただかと思えます。

2 番目が、「日常生活で、自分が手書きで書く場合」です。へボン式の方がかなり多く、68.8%という結果になっています。訓令式は25%です。

3 番目、「小学校国語科の授業で、児童にローマ字入力の方法を教える場合」です。訓令式が最も多く、85.4%となっています。

4 番目、「日常生活で、自分がローマ字入力をする場合」についても、訓令式が58.3%と最も多いですが、へボン式も29.2%という結果です。交ぜ書きも14.6%ありま

した。

28 ページは、四つの場面についてまとめた結果です。「授業で書き方を教えるために板書」する場合には訓令式が最も多くなっていますが、「日常生活で、手書きで書く」場合にはへボン式が多く、「授業で書き方を教えるために板書」する際に交ぜ書きが一部見られるということが調査結果から分かりました。

29 ページは、比べるために円グラフにしたものです。ローマ字表記を教える場合が左のグラフで、ローマ字入力の方法を教える場合が右のグラフになっています。

次の質問です。実際にどういうつづり方をされるのか、尋ねています。「あなたが「鼻血（はなぢ）」をローマ字で書くなら、どの書き方で書きますか（入力しますか）」というものです。前の質問と同じように、「それぞれの場面に当てはまる書き方を全て選んでください。」ということで調査を行いました。

一つ目の「小学校国語科の授業で、児童にローマ字の書き方を教えるために板書する場合」を聞いたところ、日本式が 45.8%、続いて訓令式が 37.5%という結果です。「ぢ」はローマ字表にはへボン式が掲載されていませんが、へボン式で板書される方も 31.3%見られました。

二つ目、「日常生活で、自分が手書きで書く場合」については、へボン式が 43.8%で最も多くなっています。

三つ目、「小学校国語科の授業で、児童にローマ字入力の方法を教える場合」は、これも日本式が 56.3%で最も多くなっています。

四つ目の「日常生活で、自分がローマ字入力をする場合」は、日本式が 52.1%という結果になっています。

その全ての回答をまとめたものが 34 ページのグラフです。訓令式、日本式、へボン式の割合を示しています。日本式を含まない回答が一部あったので、分かりやすいようにオレンジ色で示しています。

35 ページは、ローマ字表記を教える場合と入力の方法を教える場合を円グラフで示したものです。入力の場合の方が日本式を教えることが多いということが分かります。

以上がアンケートで調査した結果です。

続けて、ローマ字学習（指導）の困難点について、自由記述で調査を行いました。「ローマ字学習やローマ字入力の学習の際に、困ったことや印象に残っている児童の様子などについて、どんなことでも良いので教えてください。」という質問で調査を行っています。大きく幾つかの観点に分けられました。

まずは「複数のつづり方について」です。この回答が一番多かったように思います。「結局何が正しいのか分からないまま指導している」、「どんな状況の時には、へボン式なのか？ 通常は何式なのか？ など児童に明確に伝えることができなかった。」、「j i か z i か s h i など迷った児童がいるし、テストの採点も迷う。」、「のぼす音（母音の上に記号）の扱いに迷う。「し」や「ち」のように書き方が二つあるものもあるということはどう理解させたらよいかわからない。」、「教師である自分も統一された綴り方とは異なる部分があり、そこを矯正すべきかどうか迷う所があった。そのため、多様な綴り方を許容していることが良いことかどうか判断に困る。」という御意見です。

次に、「国語科と外国語活動・外国語（英語）科の学習について」です。「国語科で習ったローマ字の書き方と、外国語で習うへボン式ローマ字の違いに戸惑う児童が多かったことが印象に残っています。」、「英語で使う場合と表記が異なる」、「英語との違いを、どう差別化するか」、「実際の生活でそのような表し方をしないのはじめからへボン式で教えたい。特に英語の学習に書く活動が入ってきたがへボン式で習ってきていないので教え直す必要があるが、子どもたちにしてみると以前習ったことと

のちがいに違和感がある。しかし三年生の発達段階では難しいようにも思う。」という御意見です。

「定着の難しさについて」です。「書き・読みは定着が難しいです。一方で、タブレットやパソコンへの入力に慣れる時間が短いように思います。」「ローマ字を教えると、進んで使おうとする姿がよく見られた。しかし、定着させることが難しく、ワークを買ったり、日記を書かせて指導をしても、3年生が終わるとローマ字で書く機会はなくなり、継続して書く児童は少ない。」「国語科におけるローマ字の練習の時間をどこにあてるか困った（時間の確保）」、「学習内容が多すぎて、継続して練習する時間の確保が難しいので、低位の子ほど定着しないままで終わる。」という御意見です。

資料には挙げていませんが、各教科書会社の指導書に記されている配当時間数は、ローマ字を対象とした授業で大体3時間から4時間程度で、入力については1時間から2時間程度しか配当されていないという状況です。

次に、「個人差について」です。「子ども達の個人差が大きすぎること」、「興味をもつ子とたない子の個人差が大きく、ひきあげるのが難しい」、「すでにローマ字を知っている、学習している子と全く初めてローマ字にふれる子との差が激しい」ということです。

「大文字・小文字について」です。「書くときに小文字と大文字の区別がつきにくくなっている児童がいた。」「最近小文字を主に学習するため、大文字が読めない児童が多い」、「g（グラム）など、筆記体表記のものが意外と多く、身の回りからローマ字を見つける活動がやりにくい（駅の表記が大文字なもの）」ということです。

「外来語表記について」です。「拗音から入力（l y a , x y a）するときや、「ディスク」「カトゥーン」「ヴァイオリン」などの日本語にはない音を入力する際に、戸惑いがみられることがあります。高学年であれば、堪能な児童が周囲の子に入力の仕方を教えるなどして、自分たちで解決することが多いです。」ということです。

「日本語をローマ字でつづる必要性について」の御意見もあります。「実際に書くことが必要であるのか疑問を持ちながら練習ノートを使っていたこと。」という御意見です。

「日本語の特質」について、「母音と子音 読み方や書き方の規則性が分かると、読めることが嬉しそうに、身の回りのローマ字を読んでいた。」ということです。

実際に書く場面が日常生活であるのかということについては、「国語に関する世論調査」にも示されています。令和3年度調査の問8を参考にさせていただくと、「日本語をローマ字で書き表すことがあるか」に対して「ない」という御回答が75.8%となっています。授業で身に付いたものを日常生活において書く機会が非常に少ないということが予想できるかと思えます。「日本語がローマ字で書き表されているのを見る場所」として、一番多いのが「駅や道路の表示などにある日本の駅名・地名」となっているのですが、これも教科書に採録されている身の回りのローマ字表記と重なるところかと思えます。「日本語をローマ字で書き表す場面」については、「氏名をローマ字で書くよう求められたとき」が多くなっています。関連しているかどうか分かりませんが、小学校でも名刺を作成するというような活動が位置付けられていることが多いと感じています。

以上見てきたことをまとめると、主な課題は次の5点にまとめることができると思えます。一つ目が、学習内容は多いが、与えられている時数は少ないということです。二つ目は、複数のつづり方があるが、学習における扱い方が難しいということです。特に、外国語活動・外国語（英語）科との違いということと、身の回りにあるローマ字表記は、学習対象外の表記法を含む場合もあるということです。三つ目は、ローマ字入力の方法の理解については、国語科が大きな役割を担っているということが分かったこ

とです。ただし、時数は少ないという問題点があります。四つ目は、小学校学習指導要領では、「語」の読み書きを学習対象として設定していますが、ローマ字入力の実用の側面から「文」（又は文章）も学習対象にする必要があるということです。五つ目は、実生活において、日本語をローマ字（特に訓令式）で書く機会が少なく、定着が難しいので、日記を書くなど、継続的な学習を工夫しながら、現場では苦勞して指導が行われているということが見えてきました。

以上です。ありがとうございました。

○沖森主査

長岡さん、どうもありがとうございました。ローマ字教育の方針に関する歴史的経緯、そして現場の教師の指導意識、学習指導の実態を分かりやすくおまとめくださり、誠にありがとうございました。具体的なイメージを得ることができ、感謝申し上げます。

それではここで、今のお話の内容そのものについて、疑問点や、確認しておきたいことなど、直接関係する質問があれば、お伺いしたいと思います。

（→ 挙手なし。）

それでは、ただ今のお話を踏まえて、意見交換に入りたいと思います。ローマ字のつづり方に関して整理を進めていくに当たって、学校教育との関係は最も重要なところであるようにも思われます。御意見や御質問の続く間は、特にこちらから方向性をお示しすることはせず、御自由に御発言いただきたいと思います。長岡さんにも、是非とも御発言いただきたいと思います。では、感想、質問、何でも結構ですので、御自由に御発言ください。

○村上委員

長岡先生、本当にありがとうございました。非常に分かりやすかったです。

長岡先生のお話を伺っていて、そもそものところ、なぜローマ字を子供たちに教育するのかという点を考えました。国字改良論の歴史は承知していますが、日本が国際化していくために、ローマ字は必要なものだったといった考えの場合、ローマ字の位置付けは、長岡先生の資料にもあったような、英語教育のアルファベット学習に役立てるため、つまり、英語教育の補助学習としてローマ字教育ということがあるようにも思っています。

一方、訓令式、日本式は、英語で使われているヘボン式と違います。

今、現場の教員の人たちの多くが、コンピューターの入力についてローマ字教育が必要だという調査結果でしたが、これは後付けの理由だと思います。今、訓令式、ヘボン式、日本式が混在しているので、教える側も混乱するし、教わる側も混乱することになり、統一した方がいいという意見もありました。この辺りのところ、私もまだよく整理できていないのですが、英語教育補助学習としてのローマ字教育であるなら、ヘボン式に統一した方がいいと思いますし、そうではなくて、耳で聞く日本語というものをきちんと教育するというようなことでしたら、訓令式、日本式がいいと思います。

長岡先生への質問も含めての発言ですが、今の私の感想、日本の国際化ということで、英語学習の補助学習としてローマ字教育をするのならヘボン式がいいという考え方と、そうではなくて、日本語教育を更に精緻にしていくために訓令式、日本式を使っていた方がいいという考え方と、長岡先生はどちらの方でお考えでしょうか。

○長岡氏

○長岡氏

ありがとうございました。ここが正に一番混乱しているところかと思っています。目的

については、私もたどれていないところもあるのですが、昭和 26 年の学習指導要領で、第 6 章に「ローマ字の学習指導」が新設されたときに、「ローマ字の学習指導はどう考えたらよいか」というところで 3 点挙げられています。そのうちの 하나가、正に「ローマ字がもっている国際的、能率的な長所を理解させる。」という目的です。もう一つの目的に、「ローマ字の長所を生かし、国語の機能とその特質を児童に理解・習得させ、聞いただけでわかることばを使う習慣を養う。」とあって、この目的と、国際的、能率的な長所を理解させるというところの目的が、独立して存在しているということが、ポイントかと思えます。もう一つは、昭和 26 年の段階では書かれていた、「児童の精神発達の段階に応じ、国語を書き表わす一つ的手段としてローマ字を読み書きする能力を養い、あわせて国語・国字問題に対して反省する機会を与える。」というものです。これについては、言い切っていないかは分かりませんが、今は国語の学習内容としては含まれていないように思われるので、現在は、ローマ字の長所を生かして国語の機能とその特質を理解させるという目的と、国際的なところをどうするのかという点と、二つ併存しているという状況になっていると思います。

過去のいろいろな議論を見てみると、目的がずれてきていて、英語教育に役立てるためというところは、本来は担っていないのだと書かれているものもあれば、アルファベット学習と関連させて学習すべきだという意見もあります。私の立場としては、今回資料をまとめながらも、まだ見えてきていない部分があります。国語科におけるローマ字教育の役割としては、後から入ってきたコンピューターの入力に役立てるためという意義が思った以上に大きいということが今回のアンケート調査の結果から分かりました。日常生活で実用的に必要なものを国語科で力を入れて学習すべきだという考えが一つ母体となっているような気がしています。

3 年生、4 年生に外国語活動が入ってきたので、アルファベット学習のことを考えざるを得ないという状況になっているので、そこも外せないということかと思えます。少し曖昧な回答ですが、今のところそのように思っています。

○村上委員

ありがとうございました。

○沖森主査

では、ほかに御感想、御意見等ありましたら、お願いいたします。

○福田委員

長岡先生ありがとうございました。2 点、とても面白いと思ったことがあります。

配布資料 3 の 23 ページで、「ローマ字学習の内容」というグラフがありました。ほとんどがローマ字そのものの教育をしているということですが、ローマ字と日本語を比較して、日本語の特質といったものを教育することが少ないと感じました。

もう一つは、「ローマ字入力の方法」が多いということで、43 ページの 4 番に関する点です。ローマ字入力は、実用の側面から、文も学習した方がいいのではないかというお話でしたが、私自身の入力の経験からすると、文で入力することはほとんどありません。今回、「つくし」や「鼻血」など、具体的に質問を出してくださったので、自分だったらどうやって入力しているかと考えてみました。コンピューターが予測変換してくれて、いろいろ交ざった入力をして、変換してくれていると感じました。入力するとき、文をそのまま入力するのではなくて、例えば「小学校学習指導要領では」というのを入れる場合、「小学校」で一度終わる、私の場合には「学習指導要領」をよく入れるので、「学習」と入力すると、すぐに「指導要領」まで出てくるといったことになります。文というのは余り入力しないのではないかと思います。学生の入力場面

を見ていても、単語レベルで入れています。予測変換があるので、入力が、全部訓令式でないといけないとか、へボン式でないといけない、日本式でないといけないというわけでもないのかという感想を持ちました。文をローマ字で入力するという点についてはいかがでしょうか。

○長岡氏

ありがとうございます。その点、少し説明不足だったと思って反省しています。ローマ字入力の際に文単位でと書いていますが、正におっしゃったとおりで、文章を書くときに、単語や文節などに一度文を分解して入力していくと思いますが、最終的に文や文章をつづることになるという意味で記したものです。国語教育では、本当に単語だけしか掲出されていないので、実際に文章を入力するときに、単語レベルに分解するという含んだ上で書いているものです。そのところは書き方が余り良くなかったと思います。

○福田委員

ありがとうございます。本当にそうで、頭の中で音韻化して入力している感じがすると思っていました。

○沖森主査

では、ほかにありましたら、よろしく申し上げます。

○成川委員

村上委員の質問に関連して、ローマ字教育の経緯について、私からも少しお話しします。私の印象ですが、最初のうちのローマ字教育というのは、漢字廃止も含めた日本語表記、ローマ字化というのがまだ視野にあったので、ああいう形になっていたのだらうと思います。それがだんだんなくなったので、指導についても薄くなっていったということだと思います。

質問したいことが2点あります。小学校の現場については全然知らないのですが、タブレットを使う場合にはフリック入力が普通だと思います。現場ではタブレットでもキーボード式に入力しているのだらうかというのが1点です。

それから、今、実際の授業での先生方の困った点など、いろいろお話を伺いました。そうした点を踏まえた上で、ローマ字学習は今は小学校3年生ですが、では、長岡先生は、何年生ぐらいでやるのがいいとお考えでしょうか。母音と子音の発音、音声などのことを含めると、単純な印象として3年生は早いのではないかとも感じました。

この2点よろしく申し上げます。

○長岡氏

御質問ありがとうございました。1点目のフリック入力についてですが、確かに、特に低学年では音声入力や、手書きで書いて入力ということがかなり多いような印象を持っています。フリック入力も使っていて、子供によって違うとは思いますが、慣れた入力方法を使っているということになります。実際にキーボード入力が始まるのは個人差があるとは思いますが、教材としては3年生で入力の方法が位置付けられているので、3年生ぐらいから始まっていくというのが今のところの基準になっているかと思っています。

しかし、本当におっしゃるとおりで、タブレットやパソコンでどのような入力方法を取るのかというのはかなり自由度があって、特にタブレットだと手書きで書くこともできますし、音声入力もできるので、いろいろな方法で入力が行われているという

のが実情だと思います。

2点目の、ローマ字の学習は3年生に必要なかというところは、確かに、今回調べてみたときにも少し疑問に思ったところで、かなり意見が分かれているところかと思いません。キーボード入力を早くさせたいので、もっと低学年から始めた方がいいという意見も、少数意見かもしれませんが一方ではあるのが実情です。英語教育では実際に書くのが五、六年生になってからですが、こことのずれもあるので、もう少し遅らせた方がいいのではないかという意見もあります。意見が混在していて、私もまだ結論が出ないという状況です。

○成川委員

ありがとうございました。

○沖森主査

では、ほかにありましたら、お願いいたします。

○西條委員

長岡先生、いろいろ調べていただきありがとうございます。調査でnが48というところもあって、それをもって全体的な小学校の先生の実情と言うわけにもなかなかいかないところもあると思います。複数の基準があって教えにくいという御意見があったところですが、そういうことは、聞くと出てくるということはあると思います。一方で、一つにまとめればいいのか、あるいは複数の基準が必要な場面もあるのではないかという点もあります。一つ伺いたいのですが、現場の先生たちは、実感として、このローマ字の入力方法あるいは記述の方法が複数あることによって、非常に困っているのか、あるいは対処可能なのか、その辺の感覚というのはどうでしょうか。

○長岡氏

今回、確かにそんなに多くの先生方の御意見を調査できていないので、予備調査の段階というのが本当のところでは、一つにまとめればいいのかという点は、現状としては、複数の書き方が教材として入っていて、学習内容として位置付けられているので、それは現場としては扱わざるを得ないという状況です。指導する場合には工夫して何とか指導しようと思うのですが、配当時間数も少ないので、困っていることと言われれば、かなり工夫して指導しないと丁寧に押さえられないところかと思えます。

○西條委員

一方で、入力は予測変換や、音声入力もこれから主流になっていくこともあるでしょうし、実際には複数の基準があることすら気付かないで社会生活を営んでいたり、先生方自身もよく知らなかった、読んでいなかったといったこともあったりと、余りにしないで教えるというのがいいのかというような気もします。配当時間が非常に短いですね。

基準をどうするかという点をこの国語課題小委員会では話し合っていくのだと思いますが、現場の感覚としては、教えざるを得ないから教えていて、教えにくいが大変な弊害が出ているわけではないといった感じなのではないでしょうか。

○長岡氏

今のところ、入力に関しては、確かに精度も上がってきているので、どんな入力の仕方でも意外とできてしまいます。

○西條委員

分かりました。ありがとうございます。

○沖森主査

ほかにございませんでしょうか。

○田中委員

長岡先生、どうもありがとうございました。小学校の先生方が実際感じていらっしゃる、あるいは実践していらっしゃる、学習指導要領で書いてあることがずれているというのが問題だと感じました。指導要領だと、1番目に書いてあるのは、日本語の音、子音と母音の組合せ、そのことに役立てるためにローマ字を教えるということなのに、それは、先生方の調査だと非常に少なく、少数派の方に入っていました。ローマ字教育の目的が、理念と実際で違うということだと思いますが、これは非常に大きな問題だと思います。ローマ字入力のこと新しい問題として出てきていますが、その前に、そもそもローマ字教育の目的、音のことがどのようになっているのかということが大切だと思います。難しい問題とは思いますが、この問題をずっと考えていらっしゃる長岡先生が、現状をどのようにお考えになっているか、お聞かせいただければと思います。

○長岡氏

ありがとうございます。この結果を見て、確かにここが、質問項目を作る際にもかなり迷ったところでした。日本語の音韻構造について理解するためというときに、どういう質問項目が分かりやすいのかというところでまずは悩んで、「日本語の音声の仕組み」と書くはずなのに、「音声の捉え方の仕組み」という分かりにくい言い方になってしまいました。もしかしたら、それで現場の先生方が、母音と子音の組合せなどをイメージできなかったために、今回の調査結果では少なくなったということもあるかもしれません。実際にはローマ字表を見ながら教えるので、この構造についても押さえる学習というのは行われているのではないかと思います。

ただ、今回教科書調査をしていて気付いたのですが、仮名の五十音表と対照させたいのに、と個人的には思いました。仮名の表とローマ字表を対照的に載せるという教科書が一つもなかったのが、比較してローマ字の特徴に気づかせるために、仮名の五十音表があってもよかったのではないかと思います。指導書にも載っていないのですが、それで少し目的が見にくくなっているのではないかと感じました。

○田中委員

ありがとうございます。今おっしゃったことはとても大事なことだと思います。ローマ字あるいは仮名という文字の教育の話に終わってしまっていて、音声、音韻の教育として扱われていないという問題があるように、実はこれは音声教育だという考え方を、もしもっと強く出したらうまくいくのかどうか、それが教科書に実現していないということは、なかなか難しいということなんではないでしょうか。そもそも学習指導要領に余り音声という項目がないですね。話し言葉や、音読といったことになっていて、その辺りの問題がローマ字教育の問題として表れているような感じもしました。どうもありがとうございました。

○沖森主査

では、ほかにもありましたら、お願いいたします。

○古田委員

長岡先生、今回は非常に勉強になるお話、整理されたお話を頂きまして、ありがとうございました。

先生のお話とここまでの議論をお聞きしながら改めて思ったことですが、ローマ字をめぐる問題に関しては、そもそも何のために教育をするのかということを一こういう議論はしばしば無駄にも思われるケースが多いと思うんですが一少なくとも今回に関しては、それをもう一度考えてしっかり形にしないといけないのではないかという思いを新たにしました。先ほどもお話がありましたが、元々は戦前の漢字廃止等の経緯もあって、徐々にその色彩が薄まって、多少名残が残っていてといったように、大まかに言うと、まずローマ字の教育をするというのがあって、その意義をどこに見いだすかということで、様々な目的が混在しているようにも思われます。その点を含めて、もう一度、何のためにするのかということでもうしっかり骨組みを作る必要があるのだらうと改めて思う次第です。

とりわけ、先ほどの田中委員のお話にもあったように、音韻の構造の仕組みを理解する、音声とどこまで結び付けるかということに関しても、ローマ字の教育をすることがどこまで有効なのか改めて考える必要があって、ほかの在り方もあり得るかもしれませんね。その点を含めて、少し面倒ですが、何のためにというのを一から考える必要があるのではないかと思います。

また、今回お話をお聞きして、例えば、配布資料3の23ページ、授業で実際に取り上げられている学習内容というところは、私も子供が正に小学校で学んでいるところで、その学習の様子を見ていても、ほぼ予想どおりというか、やはりそういうことになっているのだなと思った次第です。

一つ意見があるとすれば、確かに、現在様々な入力の方法があって、フリック入力でもすごい速さで文章を入力する学生や生徒もいるし、音声入力の精度も高まっているという状況ではありますが、同時に、キーボード入力というのも恐らくは残り続けるのだらうと思います。その際に、とりわけ国際化ということを考えると、英文を入力する際と日本語を入力する際に、例えばキーボード配置に関しても、別の方法で覚え直すというのも非常にコストが高いことを考えると、ローマ字入力で日本語をキーボード入力するというのは、それほど簡単に廃れないというか、ずっと残り続ける可能性も十分にあると思います。そう考えると、戦前からの位置付けの名残といったことは一旦終わりにして、今実際にローマ字を見たり、キーボード入力したりするという場面を重視して考える必要があるのではないかと考えました。

すみません、少し長くなりましたが、もう一つあります。親としての考え方としては、例えば学級閉鎖になって急遽^{きんぐ}オンライン授業になることがあるのですが、そういうときに、今の自分の子供のいる小学校の場合には、タブレットの蓋がキーボードになるものが支給されていて、キーボード入力も試すわけです。そういうことで、かなり早い時期にキーボード入力をする機会が多く、しかも速めにキーボード入力するのが結構大事で、どんどん反応するときそういうものが大事になります。そういうときに、親の感覚としては、複数の書き方があると、その都度すごく困るんですね。困るといえるのは、最終的には大人は慣れていくので困らなくなるのですが、最初の教育の段階で幾つもあると、余計な面倒さというか、その都度こういうのもあるんだが…ということになります。とりわけ小学生1・2・3年生辺りの教育をしていく上では、深刻

な困難さはないかもしれませんが、思ったよりもかなり面倒ということが実際の経験としてあります。

○沖森主査

長岡さん、何か御感想があるでしょうか。

○長岡氏

ありがとうございました。正におっしゃるとおりで、音韻構造の理解にローマ字学習をすることが本当に必要かどうかというのは、私も見直す必要があるかということをおもっているところです。その辺りも深く考えるべきだと思います。

現場の混乱と関連して、複数のつづり方があることによって、何回も子供たちは学び直しをしているということが今回調べた結果からも見えてきました。まずはローマ字のつづり方を習った後に、ローマ字入力とは異なりますよということを学んで、更にアルファベットでは違いますよということを学んでいくので、学び直しで、どんどん情報を更新していかなければならないということが今生じています。その段階性をどうするのかということ、もう少し現実的にどういう意義があるのかということと併せて考えていく必要があると感じました。ありがとうございました。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございますか。

○森山副主査

本日は長岡先生、本当にありがとうございました。今の問題は非常に大きい問題だと思いますが、まず、目的に関して、私はいろいろな目的があってもいいのかなと思います。その辺り、先生はどうお考えなのか、まずその点を伺いたいと思います。

○長岡氏

ありがとうございます。今までも目的は絞られていないので、複数の目的があって、それが子供たちにとっても意義があるものだと考えられるのであれば、当然、複数あっていいと思います。

○森山副主査

ありがとうございます。そうすると、ある程度の学び直しといったことも、例えば子音と母音という音の仕組みですよということと、例えばタ行でも実際の子音が違ってくこともありますよとか、英語のようなつづり方もありますよといった学び直しというものもある程度仕方がないことという側面もあるかなと思います。

ただ、その点で、書き方が複数あるという現状に関しては、そこで防げる混乱というものもあるかなと思います。非常に単純化することになりますが、書き方として現状は訓令式中心になっていますが、長岡先生は、ヘボン式中心がいいのか、あるいは訓令式中心がいいのか、あるいは現状のように両方か、その辺りのお考えを伺えればと思います。時間数の問題もあってその辺りをどう考えたらいいか教えていただければと思います。

○長岡氏

ありがとうございます。学び直しが必要だということについては、意義が明確であれば、学び直しことによって理解が深まるということもあるので、そのような段階性

を持ってできればいいと思っています。

へボン式中心か、訓令式中心かというのは、今回調べながらもかなり迷ったところで、今のところ結論は出ていないのですが、外国語活動が入ってきたというのがかなり大きな影響を持っています。これまでは外国語活動は、小学校中学年で位置付けられてはいなかったのですが、それが変わり、同じ時期に同じようなことを学ぶのに書き方が違うというのは、混乱が生じるとは思います。大人だと、これは英語だからとか、これは日本語だからというように、教科による枠組みの意識がありますが、子供にとっては連続した学びになっているので、そこら辺の、指導上の便宜とかではなく、学びの連続性から考えたときにどうなのかというところで少し迷っている部分はあります。

○森山副主査

ありがとうございます。先ほどの調査でも、へボン式しか教えていない先生もいらっしゃるということで、少し驚きました。そういうことなども考えていかないといけないと思いました。

最後に、IT機器への入力の問題について、私もいろいろと聞き取りをしました。最初から平仮名入力を教えるという先生がいたり、後で英語のタイピングのこともあるのでローマ字入力を教えるという先生もいたり、フリック入力もありますが、昔はそれのくらいしかありませんでした。タブレットになってからは、入力の方法そのものが多様化していると思います。その入力の仕方の効果というか、どれが短い時間で一番負担なく教えられるかといった研究などはあるのでしょうか。

○長岡氏

情報教育の分野ではあるかもしれませんが、少なくとも国語教育ではそういうところの研究は見当たらない状態です。

○森山副主査

そういう観点で、何が子供たちにとって使いやすいのかというのも同時に考えていく必要があるように思います。今日は大変勉強になりました。ありがとうございます。

○長岡氏

授業でへボン式のみを扱っている先生方が多かったということに、私も結果を見て驚きました。日常生活で自分が使っているつづり方を教室で書くということが多いのではないかと感じました。ありがとうございます。

○沖森主査

それでは、ほかにございますか。

○川瀬委員

長岡先生、ありがとうございます。子供たちだけでなく大人も含めての話ですが、英語表記、英単語表記が多く生活の中に入ってきていますし、英語教育も早期化してきています。例えば、カナダという国を表すのに、まずKを書く人というのは少ないと思います。街中ではほとんどがCです。中国を表記するのに「Tyūgoku」とローマ字で書くよりも「China」と書く人の方が多いと思います。ローマ字と英語が入り乱れている状況の中で、子供たちの教育だけではなく、大人も含めて生活の中で使っていくことを考えたときに、英単語との兼ね合いというのをどのように考えたらいいと思われま

すか。漠然とした質問ですみません。

○長岡氏

非常に難しい御質問ですが、今回身の回りにあるローマ字表記を探してみると、実は英語表記の方がかなり多くなっていたり、訓令式で書かれているものを探すのは非常に困難だったりして、この辺りの問題もあるかと思えます。学習指導要領の指導事項に、日常で目にする、日常使われている簡単な単語でローマ字表記されたものとあるので、そうなると、教科書教材に採録されているものを見る限りでも、ヘボン式のものの方が圧倒的に多いという状況になっているかと思えます。

子供たちはアルファベットで書かれているものは全て集めてくるので、実際に目にするローマ字表記を探してこようという活動をする、英単語もかなり集まってきて、むしろそちらの方が多いいという場合もあるかと思えます。

○川瀬委員

ありがとうございます。もう一つ、長音記号について御質問があります。あれは、実際に街中で見たときに、これは伸びる音だということを、私は大人なので分かるのですが、子供たちは、あの記号が付いていると長音だといった認識はあるのでしょうか。大まかな聞き方ですみません。

○長岡氏

今回、児童の意識について調査できていないので分からないのですが、学習内容としては、長音符号についての学習内容も含まれているので、そこは教えていくことになるかと思えます。

○川瀬委員

続けてすみません。ローマ字を子供が書くときに、例えば手書きする場合、長音記号を使う傾向はありますか。

○長岡氏

指導としては山型で教えるので、少なくとも国語科の学習の中では、それで書く練習をしていくこととなります。ただ、日常生活でそれを書くかと言われると、その部分はまだ分からないという状況です。

○川瀬委員

ありがとうございます。

○沖森主査

では、ほかにございますでしょうか。

○森山副主査

何度もすみません。少し今のことに関連して、例えば先生方がヘボン式で教えるという場合に、「し」の音をどう書くかという問題と、撥音の「ん」をどう書くかというときに、ヘボン式だったら、Mの前がMになるといったことがあります、その辺は意識していらっしゃるのかどうか、どうでしょうか。

それから、長音の書き方をどういう書き方で書くのがいいのかということで、もし先生にお考えがあったら、その辺りも教えていただけたらと思えます。

○長岡氏

ありがとうございます。今回調べてみたときに、撥音をM表記するということが、教科書のローマ字表には一切記されていないので、実際に授業で取り上げられることは恐らくないのではないかと思います。今回、各社の指導書を確認してみたところ、MやP、Bの前はMにすることが書かれている指導書もありました。その指導書を確認された場合などには、もしかしたら授業で取り上げられている先生方もいらっしゃるかもしれません。

「SHI」の「し」については、日常生活でこの表記をされている先生方がかなり多いということが今回分かったので、授業で取り上げられる場面も多いかと思います。

○森山副主査

先生方が自分はヘボン式だと、そのように教えていらっしゃるが、部分的には少し違うのもあるということになりますね。

○長岡氏

そうですね。

○森山副主査

ありがとうございます。

長音の書き方は本当に頭を悩ませる問題で、入力の問題もありますし、音の捉え方の問題もありますし、それから英語風に長音を無視するといったこともあるなど、非常に難しいのではないかと思います。何かを選ばないといけないというときに、もし先生方の教えやすさも含めて考えた場合に、これがいいのではないかと考えたお考えがあったら教えていただければと思います。

○長岡氏

長音の書き方も含めてなんですが、日常生活で目にする単語を扱うということであれば、そちらに合わせる方が混乱は少ないかという気がしています。日常生活で書く機会というのはかなり少なく、さらに、書く場面は、氏名をローマ字で書くように求められたときということが「国語に関する世論調査」にもありました。ヘボン式で書いて教えるということが、英語教育ともずれがなくなるので、実際に調査してみないと分かりませんが、ヘボン式で初めから書くということも多いような気はします。指導書の板書例を見たところでも、そもそも活動設定がヘボン式で名前を書くとなっているものも含まれていました。教科書会社によっては、訓令式で名刺を作っているもの、ヘボン式で書いているものと、少し違いがあるということが見えてきます。

○森山副主査

そうですね、どうもありがとうございます。

○沖森主査

では、ほかにございますでしょうか。

○石黒委員

長岡先生、ありがとうございました。見える表記では、やはりヘボン式が優勢ですが、ローマ字入力の見えない表記というのでしょうか、それでは訓令式が有力というのは非常に参考になりました。

今回のアンケートや現場のことについて少しお伺いしたいことがあります。最近、

小学校の国語科の現場にも外国籍の子供たちが多く入ってきていると思います。今回のアンケート調査では、先生方がそういうことで苦労されていると、回答が少し異なってくるかという気もします。その辺りはどうなのかということと、それに関連して、そういった外国籍の児童のことに關する現場のことで、長岡先生の方で何かお考えがあればお聞かせください。よろしくお願ひします。

○長岡氏

ありがとうございます。今回の調査対象の小学校の先生方の中には、外国籍の子供が教室に多くいるという先生方も含まれています。また、英語専科の先生の御回答もあるので、そういう意味で、英語教育との関連を考えられた御回答というのもありました。ただ、今回は無記名で、その点について分からないように調査をしているので、どの回答がそういう先生方のものなのかということについては照合できません。

今回、実際に現場に行つて、外国籍の子供が含まれているような学級でローマ字学習がどのように行われているかというところについては調べていないので、今後の課題とさせていただきます。

○石黒委員

ありがとうございます。

○沖森主査

では、ほかにございますでしょうか。

○善本委員

長岡先生、本当に貴重なお話をありがとうございました。大変参考になりました。実は、今私が教えている大学生は、ほとんどが小学校の先生になりたいという志望で、私のゼミも、小学校の先生になりたい学生たちが多くいます。前にもお話ししたことがあります。彼らが、自分たちの日常生活で使うものは圧倒的にへボン式なのに小学校で訓令式を教えることについて、非常に戸惑うという意見をふだんからよく話しています。それに対して私の方からは、学習指導要領のこともありますし、小学校3年生から教えるというときに発達段階を考えて、日本語の五十音の音韻との関連性から入っていくというところで意味があるのではないかというような話もしています。今日先生のお話を伺つて、実際にへボン式で教えているという人も一定数いるということでしたが、うちの学生などがそのまま小学校に行くと、そういう可能性ももしかしたらあるかもしれないと思いました。

先生のお話で非常に面白かつたことに、「鼻血」をどうローマ字で表記するかという事例がありました。子供に教える場合や、御自身で入力する場合は、半分ぐらい「D I」とお書きになるということで、私も実際にやってみました。日本語の変換システムにもよりますが、今使っているパソコンだと、「D I」と打たないと「鼻血」と正しく出てきません。「Z I」や「G I」と打つと正しく変換できないんです。同じ連濁でも、「身近」は、「D I」と打つても「G I」と打つても「Z I」と打つても全部正しく変換するようです。変換システムを作っている人たちが、多分いろいろな事例を踏まえた上で検討しながらやっぺいらっしやるのだらうと思いますが、とても気になることがあります。ローマ字入力との関係性の問題とは切り離すべきなのかもしれませんし、余り日本語としての正しさにこだわつてはいけなひのかもしれませんが、「鼻血」は、日本語で書いたときにも「ぢ」なのか、「じ」なのかということが、ローマ字との関連で、影響を受けることがあるのではないかということです。「身近」は日本語で書いたときに「ぢ」なのか、「じ」なのか、これがローマ字表記や、ローマ字入力をど

していく中で揺れていくということがあるのかと思います。そういう意味でのローマ字と日本語との関係性の問題といったことも感じていますが、その点について、先生のお考えを教えていただければと思います。よろしくお願いします。

○長岡氏

ありがとうございました。私も今回「鼻血」の調査をしたときに、訓令式やヘボン式でも大丈夫なのかと思って、いろいろなパソコンで打ってみました。パソコンによって、変換ができたりできなかったりということがありました。実際に子供たちが使っているタブレットに何が入っているかによって、教え方が変わってくるという気がします。先ほど資料に挙げた東京書籍のものでは、「ぢ」については「D I」としか記されていません。ローマ字入力用の表を印刷して横に置いて見ながら入力すると思うのですが、そのときの配られている表に何が記されているかによっても、かなり学習内容としては影響があるかと思っています。

おっしゃったとおりで、入力ですべて許されていくと、それでも書けるんだということになって、日常生活の日本語の書き方にもかなり揺れが出てくるという影響があるかと思いました。

○善本委員

ありがとうございました。

○沖森主査

では、ほかにございますでしょうか。

(→ 挙手なし。)

ありがとうございました。本日のヒアリングでは、ローマ字教育の意義と実態に関して、現場の教師や児童の意識などについて、貴重な情報を提供していただき、活発な意見交換ができたかと思っています。本日のヒアリングと意見交換の内容については、よく整理をして今後の検討に生かしてまいりたいと思います。

最後に、長岡さんに伺いたいのですが、この国語分科会における「ローマ字のつづり方に関する整理」の検討について、期待すること、また、本日の意見交換を踏まえてお感じになったことがあれば、お話しいただければと思います。

○長岡氏

本日はありがとうございました。たくさん御意見を頂いて、私も今まで考えられていなかったところに気付けたので、本当に有り難く思います。

今回調べてみて思ったことがあります。学習指導要領解説に「「ローマ字のつづり方」を踏まえること」という文言が入ってきたのですが、実際の小学校の現場で、語を単位とした読み方、書き方を教えることになっているのに対し、「ローマ字のつづり方」は、1字ずつについて示されていて、語レベルでは示されていないということです。指導者が「ローマ字のつづり方」を確認したときに、1字ずつの書き方については確認できても、語にしたときに、どのつづり方によるものなのかといった意識が、もしかしたら難しいのではないかと感じました。そういう部分について例が示されていると、より分かりやすくなるかと思っています。

○沖森主査

ありがとうございました。長岡さんには改めて御礼申し上げたいと思います。今後の審議においても御助言いただくような場合があるかと思いますが、何とぞよろしくお願いいたします。

それでは、次の議事に移ります。ローマ字を含む、今後国語分科会で検討すべき課題の整理に関して意見交換を行いたいと思います。残された時間がやや少なくなっていますが、よろしくお願ひします。

9月以降、ローマ字のつづり方に関する整理を中心に検討してきましたが、期の終わりに向けて報告を取りまとめる必要があります。本日は、今期の終わりの報告の在り方について御協議いただきたいと思います。

まず、国語分科会で今後取り組むべき課題として取り上げる事項について、事務局と相談した上、配布資料4のようなたたき台をお示ししています。昨年度と今期の検討内容を踏まえて、国語分科会で取り組むべきことを現実的に考えられる範囲で整理したものです。

では、配布資料4について、事務局から説明をお願いします。

○武田主任国語調査官

それでは、配布資料4「国語分科会で今後取り組むべき課題として取り上げる事項（案）」を御覧ください。前の期の最後には、今後取り組むべき課題の候補として、配布資料4の上段にあるところが整理されています。

一つ目として、「現行の内閣告示に関するもの」です。具体的には、ローマ字、外来語、そして常用漢字表について整理検討が必要ではないかということです。

二つ目、「新たなよりどころ・指針の作成について検討すべきもの」として、語彙に関する施策の検討ができるのではないかと、また、外来語を含んだ専門用語の扱いに関する指針の検討ができるのではないかとということです。

三つ目として、国語分科会で、国語に関する現在の社会状況に関して提言することについて検討できるのではないかとということです。

これらを今後最終的に報告としておまとめいただくわけですが、主査とも御相談の上で、資料の下の方にある形で整理していくのはいかがかということをお示ししています。これまでの項目の立て方を少し変えまして、大きく一つ目に「表記に関する課題」、二つ目に「語彙に関する課題」、三つ目に「社会状況への対応」ということでまとめてはどうかということです。

表記に関しての1点目は、もう既に検討を始めていただいている「ローマ字のつづり方に関する整理」です。ローマ字については、来年度大規模な調査を行うことを事務局で準備しています。そうした調査を踏まえて、今行われている議論をおまとめいただきたいと思っています。

2点目は、「外来語の表記に関する整理」です。「外来語の表記」（内閣告示）は平成3年に出たものですが、そこから30年以上が経過しているので、一度見直すべき時期に来ている可能性があります。これに関しても、事務局で、比較的大きな調査ができるように準備をしています。その調査の結果、今すぐ何か手当てをする必要があるかどうかということも含めて御議論いただき、その結果を受けて、場合によっては、現在の内閣告示を含めた今後の在り方を検討いただけないかと考えています。

大きな二つ目の課題として、語彙の問題があります。これまで国語施策は、直接的に語彙に関して踏み込んだことはありませんが、これまでの議論の中で、例えば常用漢字表の語例欄の整理なども含めて、語彙表のようなものも考えられるのではないかといたお話もありました。これに関しては、非常に大きなテーマですので、そう簡単に御議論いただけるようなものではないとも思っています。一方で、学習指導要領などでも語彙の重要性ということが盛んに言われるようになっていて、喫緊の課題であるとも言えます。常用漢字表の在り方の整理といったものも踏まえながら、何かできることがないか、御検討いただけないかと思っています。一昨年度の終わりには「障害者」あるいは「障害のある方」の「障害」という表記について、国語分科会としての考

え方をお示しいただきました。そのときの検討内容に関連するところもある課題であろうかと思えます。

関連して申し上げますと、現在、昨年度行った「漢字出現頻度数調査（４）」を踏まえて、文字列の頻度数調査を行っています。これは、ある漢字を真ん中に置いて、前後一文字、合計３文字の文字列の出現頻度を調べるというものです。この調査により、その漢字がどのように使われているか、どのような語に、あるいはどのような文脈に使われているのかということがある程度分かりますので、参考にしていただけるものと考えています。

また、「専門用語（外来語を含む。）」の扱いに関する指針について検討してはどうかという点です。これまでも、国立国語研究所の取組として、外来語の言い換え提案や、病院で用いられてきた専門用語をどのように分かりやすく言い換えるかといった成果がありました。それらを参考に、より広く応用可能な形で皆さんに参考にしていただけるようなものがないかといった議論があったと思えます。

最後に国語に関する社会状況への対応ですが、昨年度の段階では、提言等を行うことについて三つの問題が挙がっていました。この三つをはじめ、国語分科会として提言を示すようなことが考えられるかどうかを検討できないか。これを５番目の課題にしています。

なお、関連する内容として、参考資料３「国際社会に対応する日本語の在り方(抜粋)（平成 12 年国語審議会答申）」と参考資料４「分かり合うための言語コミュニケーション(抜粋)（平成 30 年国語分科会報告）」のとおり、これまでの国語分科会や、かつての国語審議会の成果物の抜粋を挙げていますので御覧ください。

以上、このような骨組みで今後まとめていくというのはいかがであろうかというたたき台として御提案いたします。

○沖森主査

それでは、配布資料４とただ今の御説明に関して、質問や御意見があれば、自由に御発言をお願いしたいと思います。

○滝浦委員

御説明ありがとうございました。配布資料４の下半分、表記と語彙と社会状況への対応という三つのくくりで進めていきたいという点はよろしいのではないかと思います。

その中の４と５について、少し私見を申し上げたいと思えます。４のところでは外来語の言い換えや専門用語の言い換えという例がありましたが、「専門用語」という言い方をするのがいいかどうかというところが少し引っ掛かりました。その前の方で「障害」の話に少し触れられましたが、例えばその「障害」という言葉をどう表記するか、あるいはその「障害」という言葉自体を言い換えていく、「障害者」という言葉を言い換えていくというようなところまで含めた話がありました。従来の文字主義というか、常用漢字表の在り方に象徴されるような、文字で捉えていくという在り方を、語、言葉として捉えていくというように変えていってはどうかといったことでした。そうした観点を含めて、「専門用語」と狭めないで、用語一般というような形で、「用語の扱いに関する」という格好にしてはどうでしょうか。「外来語を含む」とわざわざ書くと、そこだけにフォーカスされるので、それは外してしまって、いろいろな用語の捉え方、関わりというのがありますよと補足をする形で、シンプルにした方がいいのではないかと思います。

もう一つは、５番目の、もっと視野の広い提言のようなことも考えられるのではないかとこの点です。考えられるとは思いますが、今日、長岡先生のお話を伺って感じた

ことでもありますし、川瀬委員の御発言も非常に示唆的だと思いましたが、今現在の日本語での言語生活において、英語という存在が、英語そのものとしてかなり入ってきてしまっているということがあります。ローマ字の問題や外来語の問題ではなくて、もう英語として入っているのではないかということで、それとどう付き合うのかということが一大問題だと思います。ただ、これに関わるような提言をしようなどと考えると、大変なことになってしまって、一つのまとまった見解を出すというのはなかなか難しいのではないかと思います。こうした項目を掲げておくというのは、志としては十分理解するところではありますが、実際に考えていく点では慎重にした方がいいかと思いました。

○沖森主査

ありがとうございました。ほかにございませんでしょうか。

○西條委員

1のところで、「ローマ字のつづり方に関する調査を実施予定（令和5年度）」と書いてあります。これは誰を対象に、どの程度の規模の調査を行って、その結果をどのように使うのかということについての御見解をお願いします。

○沖森主査

では、事務局からお願いします。

○武田主任国語調査官

まだ準備している段階ですので、本日具体的なお話はできませんが、いずれ何らかの形で国語課題小委員会にも御相談したいと思っています。

今、事務局で話題になっていることとしては、日本語が外国に出ていったときに、諸外国でどのような表記が行われているのかといったことも視野に入れるべきであろうという点。また、言語景観の問題がありますので、例えば実際に社会生活の中で、ローマ字がどのように使われているかといったことを調べてはどうか。また、できることなら教育現場も調査対象として考えていきたいといったことがあります。調査方法等については今後検討していくことになりますが、この小委員会の中で繰り返し確認されてきたこととして、ローマ字に関しては、表面的に見える部分だけではなく、人の内面で活用されている部分というのがあったといった認識がありました。その辺りについても、可能であれば何かしらの調査ができればいいと考えています。

調査の具体的な内容については、今後改めてこの国語課題小委員会の中で御相談していきたいと思っています。

○西條委員

今伺ったことは、それぞれ多分目的が違って、サンプル調査みたいなことをすると、解析が非常に難しいと思います。先ほどの $n=48$ の問題もありましたが、 n が多ければそれでいいという問題でもないし、どうやって解析するかということは目的に依存するので、何の目的でどういう調査をするのかという調査設計をしっかりとの方がいいと思います。いろいろなことを今おっしゃっていましたが、何を優先するのかということについても議論した上で調査した方がいいという気がします。

○武田主任国語調査官

ありがとうございます。是非、御議論いただきたいと思っています。

○沖森主査

ほかにございませんでしょうか。

○石黒委員

今回の整理に関して、表記、語彙、社会状況への対応という三つに関しては、滝浦委員がおっしゃるように、私も非常に良いものだと思います。その中で少し気になったのが、「社会状況への対応」で、「5 国語に関する提言等を行うことについての検討」とあるところです。今の段階で具体化しにくいことはよく分かるのですが、表記と語彙の方が具体的である一方、5だけが項目一つで漠然としている気がします。この国語課題小委員会では、結構大きなことを話し合ってきています。もちろん、表記や語彙も非常に重要なことですが、実際にはそのほかいろいろな面について話し合っているのに、表記や語彙だけをやっているような印象が、これだけを見た方は感じられるのではないかという懸念を持ちました。いきなり提言と言わずに、項目を二つぐらいに分けて、社会の現状についての整理を行っているということと、それから提言等も検討しているとお書いておいた方がバランスが取れていいかと思いました。

○沖森主査

ありがとうございます。ほかにございますでしょうか。

(→ 挙手なし。)

ありがとうございます。幾つか修正すべきところがありますが、この配布資料4の内容を、今後の検討課題として、最終的な報告の形にまとめてまいりたいと思います。次回の国語課題小委員会では、取りまとめ案のたたき台をお示しし、御検討いただきたいと考えています。

そろそろ終了の時間になりましたので、本日の協議については以上で終わりにしたいと思いますが、何か言い残していることがありましたら、お願いしたいと思います。

(→ 挙手なし。)

では、本日の意見交換の内容については、よく整理して、今後の検討に生かしてまいりたいと思います。

最後になりましたが、本日ヒアリングに御出席いただきました長岡由記さんには、改めて御礼申し上げたいと思います。ありがとうございます。

次回の国語課題小委員会では、今後、国語分科会で取り組むべき課題の整理に関する取りまとめに向けて、報告案のたたき台を検討していただきたいと考えています。そのほか、本日十分に時間が取れなかったこともあって、お話しになれなかったことがありましたら、メールや電話などで是非事務局にお伝えいただければと思います。

本日もオンラインでの開催となりましたが、無事に終えることができ、御礼申し上げます。本日は、年内最後の国語課題小委員会開催となりました。この間、小委員会の運営にいろいろと御協力いただき、感謝申し上げます。来年も期末に向けて、何とぞよろしく願いいたします。

それでは、本日の国語課題小委員会は、これで閉会といたします。御多忙のところ、御出席いただき、ありがとうございます。